

資料検索システムの利用による英語の連続的学習

—高年次英語演習『アカデミック・イングリッシュ』への試み—

大月 敦子

岩井 雅史

0. はじめに

信州大学高年次生を対象とした授業、英語演習『アカデミック・イングリッシュ』の人文学部及び理学部の授業において、平成16年度より、英文ライティングと英文読解の練習に、論文・資料検索システムの利用を試みた。その結果、一定の成果が得られたことから、この検索システムの授業利用に関して、その目的；実施方法・内容；成果について報告を行う。

高年次生を対象とした本演習授業の目標は、初年次に学習・習得した英語力を、更に高いレベルへと育成・定着させ、専門課程において求められる英語力、特に英語運用力を築くことにある。そこで本授業では、本稿が提案する英語の「連続的学習法」による、専門課程への架け橋となる英語運用力の育成を目指した。この「連続的学習法」を英語演習授業の中で実現するために、論文・資料検索システムを利用した。なお、この論文・資料検索システムを利用するにあたっては、信州大学附図書館の協力を得た事を報告する。

第一節では、本稿が提案する「連続的学習法」の概念と目指す目標について説明し、第二節では、「連続的学習法」の英語演習『アカデミック・イングリッシュ』への応用の妥当性について議論する。第三節では、論文・資料検索システムが、実際の授業の中でどのように利用されるかを示す。第四節では、本稿で利用した論文・資料検索システムについて、それぞれが提供するデータについて解説し、第五節では、これの学習効果を報告する。

1. 英語の連続的学習がもたらす学習効果

1. 1. 「連続的学習法」について

多種多様な英語学習法がある昨今、どの学習法にも共通して提案されているのが、学習の連続性である。この学習の連続性は、様々な語学教育の局面に求められている。まず、語彙・文法等の言語知識を段階を踏みながら連続的に学習する。例えば文構造については、単文から複文へ、そして重文へと段階的に行う連続的学習。また、4技能『読み・聞く・話す・書く』を、インプットとアウトプットを中心とした連続的学習。4技能をそれぞれ個別に学習するのではなく、「読み」「聞く」のインプットと、「話す」「書く」のアウトプットを、交互に織り交ぜて連続的に学習する。更には、学習教材のトピックが、学習者の成長や興味に沿うものであり、大学であるならば、専門・教養科目を意識した題材を用いた学習、言い換えれば、学習教材のトピックと学習者との連続がある。

1. 言語知識の語彙・文法を連続的な学習
2. 4技能をインプットとアウトプットを軸に連続的な練習
3. 学習教材トピックと学習者に関連のある連続的な学習
4. 上記1. 2. 3. の連続性

上述の1. 2. 3. 項それぞれが連続的に学習されることは、特に目新しいものではなく、これまで様々な英語学習の場において行われてきたことである。本稿では、英語運用力の育成という観点から、この連続的学習を更に一步進め、これら1. 2. 3. 項の学習が相互に連続性を持ち合う方法を提案し、図1. がその概念を図で表している。

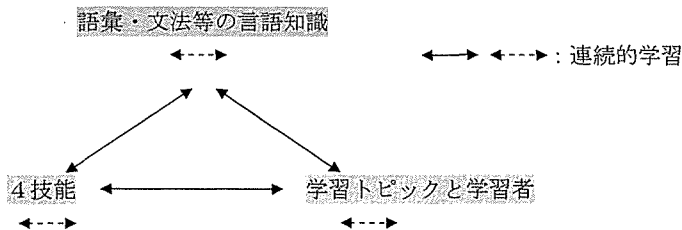


図1. 「連続的学習法」

1. 2. 英語の「連続的学習法」の目標

この「連続的学習法」の第一の目標は、柔軟性のある英語力を育成することにある。英語を知識や教養としてではなく、使用するためのものとして学習・習得することが求められている昨今、英語運用力のみが強調される傾向がある。しかし、この英語運用力は、大学教育という観点から見れば、決して中身のないテクニカル偏重のものであってはならない。そこで『トピックとなる知識や議論の理解』を背景に、『言語知識』を軸に、『読み・聞く・話す・書く』の4技能を学習することで、中身を伴う柔

軟性のある英語運用力を身につけることを提案する。それぞれを個別に学習するのではなく、複数の学習項目を同時に学習し、それぞれが相互作用し合う中で、柔軟性のある英語力を育成することが出来るようになるだろう。これを第一の目標とする。

第二の目標は、より学習効果の高い学習法を提案することである。第二言語習得に際し、語彙・文法等の言語知識の習得は、実際の言語運用の中での方が効果的であることは、Jan H. Hulstijn (1989) の *Interlanguage* に関する認知科学研究の報告からも明らかである。例えばこの中で Jan H. Hulstijn は、the two word-order rules の習得について、全く習得していない第二言語学習者 (SLL: Second Language Learner) と、ある程度習得している学習者とが、同じリーディング学習を行った結果、最終的には the two word-order rules の習得レベルに既習者と未習者の間に差異がなかったと報告している。つまり、言語運用力鍛錬のためのリーディング学習を通して、the two word-order rules の言語知識を習得するという、相乗効果的な学習法の効果が示されている。これはまさしく連続的学習効果と言えよう。他の要素との相互作用によって“注意 (Attention)”を喚起し、それによって高い学習効果が得られるようになると思われる。

以上、「連続的学習法」において、“柔軟性のある英語力の育成”“高い学習効果を得る”という二つの目標が設定された。

2. 「連続的学習法」を適用する背景及び理由

2. 1. 「連続的学習法」利用の妥当性

次に、本稿で報告する『アカデミック・イングリッシュ』の授業を、連続的学習の対象として扱う背景と理由について述べ、それによって「連続的学習法」利用の妥当性について論じたい。

大学の共通教育の目的について信州大学は、「専門教育の基礎となる教育を施しつつ、専門教育と連携して、自ら具体的な課題を見つけ出しその解決に果敢に挑戦する精神とユニークな個性を育成する。」¹⁾と述べている。またアカデミックとは、『大学の・人文科学の・学究的な・理論的な』(研究社・新英和中辞典・第六版・1994年)と定義される。つまり専門課程における学究的・理論的教育の基礎となる本演習授業『アカデミック・イングリッシュ』は、まさに専門課程への架け橋として位置付けられている。そこで本稿が考える連続的学習法が、この専門課程への架け橋である演習授業『アカデミック・イングリッシュ』に、どのように応用されるのかについて述べたい。

英語学習が専門課程にどのように結びついていくのかを考える時、学習教材として扱う内容が専門課程での学習内容に関連していることは言うまでもないが、信州大学

の共通教育の目的にもあるように、学生個人の興味の対象もまた念頭に入れる必要があるだろう。これも見方を変えれば、学習者と英語学習との連続性と言えるだろう。そこで、本演習授業で課すことになるファイナル・レポートのテーマは、各自の興味の対象を選べることを重視した。しかしそれによって、前述した専門課程への架け橋としての位置付けが、希薄になると思われるかもしれない。しかし、たとえ各学生が取り組むテーマが専門の学問と異なったとしても、信州大学の共通教育の目的『自ら具体的な課題を見つけ出しその解決に果敢に挑戦する精神』に貢献すると共に、『アカデミック・イングリッシュ』という題目にも足ると考えている。但し、実際に学生が選ぶテーマのほとんどは、専門科目のものであるか、またはそれに近いテーマ²であった。

以上の理由から、英語演習授業『アカデミック・イングリッシュ』に「連続的学習法」を適用することは妥当であると考えた。

2. 2. 論文・資料検索システムの利用と「連続的学習法」

次に、論文・資料検索システムを利用することと「連続的学習法」との関係について述べる。本稿では以下の理由から、論文検索システムを利用することで、英語の連続的学習の可能性が広がると考える。

1. 英文論文・資料を検索する中で運用力としての読解力と、その際に得られる言語知識の連続的学習
2. 情報収集活動を通して、情報収集とコミュニケーションのための、ツールとしての英語を学習していることを実感
3. テーマについての知識・理解と、それによる読解力の向上
4. 英文読解とライティングの連続的学習

1番目の、“英文論文・資料を検索する中で運用力としての読解力と、その際に得られる言語知識の連続的学習”とは、情報を入手するために膨大な英文を瞬時に読み取る運用力としての読解力が育成され、その学習活動を通して言語知識の学習が期待されることを言う。2番目の“情報収集活動を通して、情報収集とコミュニケーションのためのツールとしての英語を学習していることの認識”とは、英文情報の収集活動を行うことによって、これまでの学習のための英語が、英語の一面でしかなく、身をを持って体験することになるからである。3番目の“テーマについての知識・理解と、それによる読解力の向上”は、テーマについての知識を、より深く理解することで英文読解力が向上することを言っている。4番目の“英文読解力とライティング力の連続的学習”は、収集した資料をもとに英文レポートを作成することによって、資料の英文を応用した英文ライティング練習ができることを言う。しかしここで挙げた四つの理由は、それぞれ独立したものではなく、互いに影響を与え合い、連続的な

関係にある。このように論文検索システムを利用することによって、英語の連続的学習が期待でき、しかも、この間接的(moderate)なアプローチは、従来の知識中心の英語学習法に対し、学習者に負担の少ない、学習者中心(Learner-centered)の学習法と言えよう。

補足となるが、今日の高度情報化社会において、多種多様な情報が学生達の日常生活に大きな影響を与え、時には深刻な社会問題を引き起こす要因にもなっている。そしてこの傾向は、今後飛躍的に増大するものと予想されている。例え英語の授業といえども、インターネットを利用して情報を収集するからには、学習活動の中で学生の倫理観を育てることも怠ることなく十分に配慮し、それによって情報倫理教育にも貢献できると考える。

3. 授業の流れと学習内容

本稿で取り上げる英語演習『アカデミック・イングリッシュ』は、週1回90分間授業で、回数は半期15回行われる。授業の主なねらいは次の通りである。「専門的な学術研究において必要とされる英語の読解力(リーディング)の向上と英語のパラグラフの構成や論理の展開について多角的に学び、パラグラフ・リーディングの技法の更なる向上に努める。あわせて、パラグラフ・リーディングで学んだ論理構成を応用して、英語の論理に沿ったパラグラフ・ライティングの技法の更なる向上も目指す」(信州大学2007年シラバス)。この授業は、基本的に英文読解練習とパラグラフ・ライティング練習から構成されるが、授業のまとめとしてファイナル・レポート(A4用紙2枚分)を課しており、その作成準備も、無理のないよう、毎回の授業の中で段階を踏みながら少しずつ書き溜めることにしている。

本稿が報告する、論文・資料検索システムの英語演習授業への利用は、授業の三本柱である、リーディング練習、パラグラフ・ライティング練習、ファイナル・レポート作成の中で、ファイナル・レポート作成時を中心に行われるが、第二節でも述べたように、その連続的学習機会の提供によって、他のリーディング、ライティングの学習効果も持つ。各回の授業は、連続的学習がより効果的になるように、関連性を持つように設計されている。以下は実際の授業での学習の時間配分と流れである。

<学習の時間配分と授業の流れ>

- | | |
|--------------------|-------------------------|
| 40分：リーディング練習 | ：“PRISM Book 8: Orange” |
| 20分：パラグラフ・ライティング練習 | ：オリジナル教材(付録1) |
| 30分：ファイナル・レポートの準備 | ：論文・資料検索システムによる学習 |

また、次の表 1 は初回授業の際に配布される授業の予定表である。

表 1 : 「アカデミック・イングリッシュ」シラバス

Academic English Lesson

<u>DATE</u>	<u>READING PRACTICE</u> (text: “PRISM orange”)	<u>WRITING PRACTICE</u>	<u>FINAL REPORT</u>
1 st :	C-1 “Critical Reading”	<u>Summary No.1</u>	
2 nd :	C-2 “Previewing Skill 1”	<u>Summary No.2</u>	<u>Decide the Theme</u>
3 rd :			<u>Library Tour</u>
4 th :	C-3 “Previewing Skill 2”	<u>“Introduction”</u>	<u>Introduction</u>
5 th :	C-4 “Previewing Skill 3”	<u>“Describing”</u>	<u>Supporting 1.</u>
6 th :	C-5 “Previewing Skill 4”	<u>“Cause and Effect”</u>	<u>Supporting 2.</u>
7 th :	C-6 “Previewing Skill 5”	<u>“Contrast and Comparison”</u>	<u>Supporting 3.</u>
8 th :	C-7 “While-Reading Skill 1”	<u>“Classification”</u>	<u>Supporting 4.</u>
9 th :	C-8 “While-Reading Skill 2”	<u>“Graph and Chart”</u>	<u>Supporting 5.</u>
10 th :	C-9 “While-Reading Skill 3”	<u>“Conclusion”</u>	<u>Conclusion</u>
11 th :	C-10 “While-Reading Skill 4”	<u>“Gratitude”</u>	<u>Gratitude</u>
12 th :	C-11 “Reviewing Skill 1”	<u>“References/ Contents/Appendix/Footnote”</u>	
13 th :	C-12 “Reviewing Skill 2”	<u>“Abstracts” /Proofreading and Correction”</u>	
14 th :	C-13 “Reviewing Skill 3”		<u>Submit the final report</u>
15 th :			<u>Return the final report with score</u>

表 1. に示すように、毎回の授業は、READING PRACTICE、PARAGRAPH WRITING、FINAL REPORT から成る。READING PRACTICE では読解練習を行い、PARAGRAPH WRITING ではオリジナル教材を使って、ストラテジー毎にライティング練習を行い、その練習がファイナル・レポート作成にも応用され、学習成果が反映されることになる。そして FINAL REPORT では、収集資料を基に、また READING PRACTICE 及び PARAGRAPH WRITING での練習を応用しながら、負担増にならないように、毎回の授業の中で少しずつ段階を追ってレポートを仕上げていくように工夫されている。

FINAL REPORT の作成に、論文・資料検索システムを利用する際には、以下の点に注意を促し、時には個々に指導を行うことにしている。

1. 参考とした資料は、学生が自分で作成した英文と区別するために、必ず添付として明記する（但し、参考資料の英文を真似ることは大いに推奨している）。
2. 引用文だけでなく図表を利用するよう薦める。
3. インターネットの検索システムを利用する時は、信頼性・公共性の高いサイトから情報を得るように薦めている。
4. テーマによっては、必ずしも英文資料である必要はないが、ホームページに英文サイトを持っている可能性の高い自治体や公共施設・団体へのアクセスを薦

めている。

また、各自がテーマを選ぶ際には、テーマの内容が抽象的なものは避け、出来るだけ具体的な事柄であることが望ましい。なぜなら抽象的なテーマは、英文の解釈やライティングが困難であるためである。具体的な事柄を説明・表現する方が、大学の教養英語レベルには適切であると考えられる。また同じ利用から図表を利用することも薦めている。

4. 論文・資料検索システム

論文・資料検索システム利用についての説明及び練習は、1回90分間の授業で行った。90分授業の中で、始めの約45分間は論文・資料検索システムの紹介を行い、次の20分間は検索練習課題を与えて指導を行った。残りの25分間は各自のテーマについて学生自身で検索を行った。

以下4.1.項では、用いた論文・資料検索システムの概要について、4.2.項では検索指導手順について具体的にどのように行われたのかを説明する。

4.1. 使用した論文・資料検索システムの概要

授業の中で取り上げた論文・資料検索システムは、次の通りである。

<日本語論文・資料>

・ CiNii (サイニイ) (提供 国立情報学研究所 (NII))

日本語の雑誌論文・雑誌記事を検索するためのデータベースである。国内の学会誌や国内大学紀要に掲載された論文情報に加え、国立国会図書館作成の雑誌記事索引に収められた論文情報も提供されている。検索は、論文名・著者名といった項目別の検索語指定に加え、「フリーワード」という全項目を対象とした検索も可能である。論文によっては、PDF形式で全文が収録されている。全文の利用条件は掲載誌によって異なり、無償で閲覧できるものと、契約した機関内からは自由に閲覧可能なもの、PPV(論文1本ごとに利用者が支払う方式)で利用できるものがある。

・ MAGAZINEPLUS (マガジンプラス) (提供 日外アソシエーツ)

日本語の雑誌論文・雑誌記事を検索するためのデータベースである。国立国会図書館の雑誌記事索引のほか、経済文献の索引誌として定評のあったJOINTのデータや、各種論文集・学会年報・総合誌・ビジネス誌等、日外アソシエーツが独自に採録してい

る論文・記事情報を提供している。

- ・ Web OYA-bunko (ウェブおおやぶんこ) (提供 大宅壮一文庫)

日本語の一般雑誌の記事を検索するためのデータベースである。学術雑誌ではない、週刊誌・大衆誌・総合誌といった、他のデータベースが採録しないような雑誌の記事に関して、独自の分類や件名によって索引付けを行っている。提供されているデータは1988年以降のものである³。

<英語論文・資料>

- ・ EBSCOhost (エブスコホスト) (提供 EBSCO)

英語の雑誌論文・記事を検索するためのプラットフォームである。複数のデータベースを収めており、幅広い分野の文献を検索することができる。また、ジャーナルのタイトルによっては、PDF形式またはHTML形式で全文を収録している。

特長として、個々の論文の主題を示す統制語である件名⁴表示がある。同じ概念であっても著者によって異なる書き表し方があり得るが、それらを統一的に検索できるようにするために、索引者によって付されるキーワードが件名である⁵。本システムにおいては、個々の書誌情報画面でその論文の件名が表示されるのに加え、検索結果一覧画面上でも、入力した検索語に関連があると思われる件名の候補が表示される。そして、それぞれの件名をクリックすると、その件名で絞り込み検索を行うことができ、主題による検索を非常に便利に行えるシステムになっている。

- ・ Scopus (スコーパス)⁶ (提供 Elsevier)

英語の雑誌論文・記事を検索するためのデータベースである。採録範囲は自然科学系のジャーナルが中心だが、近年のものに限れば、社会科学系ジャーナルも多数タイトルを採録している。このデータベースの特長は、論文の引用・被引用関係を収録していることである。すなわち、論文Aが論文Bを引用している場合、Aのデータには「Bを引用している」、Bのデータには「Aに引用されている」という情報が、それぞれ入っている。これによって、引用された論文をたどっていく検索や、引用された回数が多い論文の検索といった、より幅の広い検索が可能となっている。

- ・ Web of Science (ウェブオブサイエンス) (提供 Thomson Scientific)

英語の雑誌論文・記事を検索するためのプラットフォームである。自然科学系・社会科学系・人文科学系の3種のデータベースを主要な検索対象としている。上記 Scopus

と同じく、論文の引用・被引用関係を収録するデータベースであり、歴史はこちらの方が古い⁷⁾。Scopus と比較すると、採録誌をより絞り込んでおり、各分野でコアジャーナルと呼ばれる重要な雑誌を採録するようにしている。このデータベースの被引用データをもとにして算出される、各ジャーナルの論文 1 本あたり平均被引用数を示す「Impact Factor」は、しばしば雑誌評価の指標として用いられている。

4. 2. 論文・資料の検索指導手順

1) 検索の必要性

検索の方法を学ぶ前に、なぜ検索が必要になるかについての説明を行う。学生の場合、レポート作成そのものの必要性は認識していても、レポートや論文を書くのに先行文献や参考資料が必要であるという意識が身につけていない場合が多い⁸⁾。そうした学生に対しては、検索の方法だけを説明しても、それを活用しようと思うことは少ないし、方法習得にも真剣に取り組もうとは考えない。したがって、まずは文献検索がなぜ必要かを説明する必要がある。

今回は、“standing on the shoulders of giants” というニュートンの言葉を引用し、どのような成果も、過去の成果を踏まえた上にあるということの説明したうえで、踏まえるべき資料の種類として、図書・雑誌論文・新聞記事・Web サイトの 4 種類を挙げて、それぞれの特徴（表 2）と、資料の評価の仕方（表 3）について説明した。そして、特に重要な資料である図書と雑誌論文について、検索の仕方を身につけることが、レポート作成の上で必要であることを述べた。

表 2. 資料の種類と特徴

図書	体系的な知識 出版に時間がかかる
雑誌論文	学術研究の主戦場 媒体は電子形態が一般化
新聞記事	速報性が高い
Web サイト	玉石混交・千差万別 不安定（消える・書き換わる）

表 3. 資料の評価

著者のプロフィール・業績
どのような文献を引用しているか

他者の目が入っているか

雑誌論文 = 査読 (他の研究者による評価)

出版物 = 編集者

Web サイト = ?

上記を踏まえて、(少なくとも現時点では) 紙で出版された資料を用いるのが適切であろうと述べた。

2) 検索の実際

次に、各検索ツールの特長を説明した後、EBSCOhost を例に用いて、実際に検索画面を表示しながら、キーワードの入力方法・検索結果画面の見方・書誌情報画面の見方を解説した。また、検索結果画面から件名によって絞り込む方法についても説明した。

先述のように、EBSCOhost は論文の主題を示す件名による検索機能が充実している。このため、検索キーワードの選び方にそれほど習熟していない学生でも、とりあえず思い付いたキーワードを入れて、表示された件名の中からより関心テーマに近いものを選択していくことで、検索漏れをある程度カバーすることができる(図1)。ウェブ検索エンジンの普及もあり、検索というとキーワード検索が非常に一般的になったが、キーワードの選択によっては、思う通りの検索結果が得られないことがしばしばある。そのため、このような主題検索も併用することが有効であることを説明した。

The screenshot shows the EBSCOhost search interface. At the top, there are navigation links and a search bar. Below the search bar, there are search filters and search criteria. The search criteria are: "検索条件: tsunami" and "検索するフィールド: Academic Search Elite". The search results are displayed in a table with columns for "すべての結果: 120 / 2387" and "ページ: 1 2 3 4 5 次". The search results are:

検索結果	検索結果の概要
1. Analytical Modeling of Landslide Generated Waves. By Di Rienzo, Marcello. <i>Journal of Waterway, Port, Coastal & Ocean Engineering</i> , Jan/Feb 2008, Vol. 134 Issue 1, p63-60, Ep. 1 diagram, 6 graphs. DOI: 10.1061/(ASCE)7733-550X(2008)134:1(63). (AN: 27926510)	Check OPAC
2. What's on Their List. By Lewenson, Eugenia. <i>Ryan Oliver; Christopher, Tracyk; Fortune</i> , 12/10/2007. Vol. 155 Issue 12, p36-37, 2p. 23c. 4bw. (4V 27792641)	Check OPAC
3. A Warning About East Coast Tsunamis. By WILLIAM J. BROAD. <i>New York Times</i> (11/11/95 to present), 12/3/2007, p4, Ep. (4V 27818430)	Check OPAC
4. Evidence from the Crown Creek Member (Pleistocene Stage) for an impact-induced transgression event in the late Cretaceous Western Interior Seaway. By Weber, Ryan D.; Watkins, David K. <i>Geology</i> , Dec 2007, Vol. 35 Issue 12, p1118-1122. 4p. (AN 27616699)	Check OPAC

図1. EBSCOhost での件名提示の例

“tsunami” で検索したところ、“INDIAN Ocean Tsunami, 2004” や TSUNAMI

Warning System”等のより限定的な件名、“EARTHQUAKES”等の関連する件名などが候補として提示された。

そして、上記によって検索した論文本文を入手するための方法として、電子ジャーナルの閲覧方法・図書館の所蔵検索・文献複写申し込みの方法について説明を行った。

最後に簡単な検索課題を1つ出題し、その後は学生がレポート課題に取り上げる内容に関する文献を、各自で検索させた。

5. 考察

英語演習授業「アカデミック・イングリッシュ」のファイナル・レポート作成に、論文・資料検索システムを利用した結果について、次のように成果と課題別に考察を行う。

成果1) 英語論文・資料を演習授業に利用することによって、本稿が提案する連続的学習の枠が広がり、英語4技能のうち、読む・書くの技能の相互作用が促進され、それによって無理のない学習者中心の学習環境を提供することが出来た。

特にレポートのイントロダクションからボディ、そしてコンクルージョンへと進むにつれて英文ライティング力が向上したことが挙げられる。論文・資料の英文を学習し、自分の英文の中に応用していく中で、始めは模倣レベルであったものが、コンクルージョンの段階では、学生自身が自分の表現として発展させている例が多かった。このことは、大月敦子(2004)においても、英文要約練習による英文ライティング学習が同じような効果があると主張されている。

和文英訳に慣れていても、テーマについて英文で自分の意見を書くこと(英文ライティング)に不慣れな日本人学習者にとって、英文の模倣から始まり自分の表現へと発展させる学習法は学習者に負担が少ない。このように学習者に負担が少ないことが、「連続的学習法」の特徴と言える。

成果2) 英語運用力の学習であることを実感すると共に、運用としての英語力の育成に貢献出来た。

一つのテーマについて英文の情報を集め(この時は、英語を速読している)、その集めた情報を読んで理解して(この時は、精読している)その理解を英文でまとめ、読み手に伝える。これら一連の学習は、レポートのイントロダ

クシヨンの部分で、学生各自がレポートを書く目的を明確に示すことによって、英語運用を学習していることが明確になる。

英語が学習のためではなく、コミュニケーションのための運用手段であるということを実感することによって、これまでの英語学習に対する閉塞感を和らげ、学生各自が今後、英語学習を能動的に捉え取り組む機会を提供できたと考える。

成果 3) 学生の探究心に訴えることが出来た。

学生が興味を持ったテーマを調べることによって、探求心を持ち、更にそれをまとめるという学習プロセスを経る。それによって興味レベルのものが形になり、しかもそれが英語であるということによって、達成感が得られたと考える。

成果 4) 論文・資料を利用することによって、客観的な見方・議論の必要性を認識する機会を提供することが出来た。

これまでの興味レベルのことについて、論文・資料を調べ、それに沿って考えることから、客観的な見方を経験し、専門課程での議論の参考になると考える。

成果 5) 情報収集のノウハウを伝え、それに際しての注意を喚起することが出来た。

インターネットからの情報収集に際して、何を探すのか、その探す対象ごとの収集方法について、説明を受けるだけでなく、練習課題に取り組みながら具体的に分かりやすく学ぶことが出来たと考える。特に図書館が契約する検索システムを利用することで検索システムを身近に感じ、専門課程での利用意欲を醸成したと考える。

一方、以下の課題が残された。

課題 1) 半期、実質 4 ヶ月の学習期間の学習量として適切であったか。

表 1 が示すように、一時限 90 分の中で、英文読解練習、パラグラフ・ライティング練習をし、残り 30 分で、このファイナル・レポート作成の準備をするという内容を時間的・量的に考えると、恐らく学生の自宅での学習量は多かったと推測する。今後、この点についての検討が必要である。

課題2) インターネットのサイトから資料を探し、それを利用する際の注意点について、より明確な指導を行う必要がある。

口頭では何度か説明し注意をしたため、不正行為はほとんどなかったが、その指導をより明確にするために、資料を探す際の注意点だけでなく、それらを英文にまとめる際の注意点についても、書面で指導する必要があると考える。

課題3) 時間的制約から、英語の言語知識を提供する機会が少なかった。

語彙・文法などの言語知識については、読解練習とパラグラフ・ライティング練習の中で随時行ったが、その説明について、学生の知的好奇心を満足させるには十分だったとは言えない。今後は言語知識の項目毎にプリントにまとめ、配布することで補いたい。

以上、本授業を推進することによって、5つの成果が得られ、3つの課題が残された。

6. まとめ

信州大学附属図書館の協力により、論文・資料検索システムを、英語演習授業「アカデミック・イングリッシュ」のファイナル・レポートの作成に利用することが出来た。今後は、得られた成果については更に精査し、残された課題については検討及び修正を行い、授業の更なる改善に努めたい。また英語の学習効果向上のために、「連続的学習法」の検討を重ねていきたい。

第1・2・3・5節を大月敦子が担当し、第4節を岩井雅史が担当し、まとめを両者が担当した。

謝辞

今回の論文を作成するにあたって、多くの方々より多大な御協力を賜りました。信州大学附属図書館の皆様方には、大変御忙しい中、検索システムの利用方法について学生指導をしていただきました。心から感謝申し上げます。有路憲一先生には、査読の際に丁寧な御意見、御指導をいただきました。心より御礼申し上げます。

1.

Let's Practice Writing

~from Paragraph Writing to Essay Writing~

1. Describing

1) What are you going to describe about? People / Products

2) Example Paragraph

We are looking for a man who stole a diamond ring from Matsumoto Jewelry Store. According to the store manager, the man is approximately 6 feet tall, very muscular, and about 30 years old. He has short, straight brown hair and wears glasses. His most distinguishing mark is the dimple in his chin. He had on a short black shirt and blue jeans. If you see anyone fitting this description, please contact us immediately.

~The Matsumoto Police Office~

3) Useful Expressions

《Description of People》

- I'm 20 years old and 165 cm tall.
- I've rather short, straight black hair.
- I'm wearing gold-rimmed glasses and small silver earrings.
- She is wearing heavy blue eye make-up.
- She has on / is wearing a long black coat and red nail polish.

《Description of Clothes & Products》

- His practical plaid blanket is 52 inches (132 cm) wide and 76 inches (193 cm) long with fringe on two sides.
- She has a bag that is big and rectangular and soft covered with a strap. It also has a zipper around the front and wheels.
- His sweater is made of cashmere and has long sleeves, a soft collar and five black buttons down the front.

Let's Describe Your Friends

(Topic): I introduce my friend _____

(Supporting): _____

(Conclusion): _____

注

¹ 信州大学全学教育機構 <http://zengaku.shinshu-u.ac.jp/zen/index.php?topic=kyouyou> (accessed 2008-01-18)

² 使用する言語が英語であるため、英文ライティングに不慣れな学生にとってレポート作成は困難であることは十分予測され、そこで取り組むテーマが抽象的にならぬよう、できるだけ具体的な事象・事柄であるよう、構成の段階で丁寧に指導する必要がある。

³ 1987年以前の情報は、冊子体の『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録 1985～1987』によって入手することができる。

⁴ 画面上では「サブジェクトの用語」として表示される。

⁵ 例えば「牛海綿状脳症」は、記事によっては「BSE」「狂牛病」などと表記されることがありうる。しかし、いずれの表記の記事に対しても、件名として「牛海綿状脳症」を付し、同時に、「BSE」や「狂牛病」で検索した場合は「牛海綿状脳症」へのリンクを表示するようしておくことで、どのキーワードを入力しても、網羅的に検索することができる。

⁶ 信州大学においては、Scopusの契約は平成19年度で終了する予定である。

⁷ 1961年発行の、冊子体での Science Citation Index が起源。

⁸ 米澤 (2007)。

参考文献

1. 大月敦子. 2004. A Report on Practice in Writing English Summaries for Learning Second Language by University Students. 第一回日本大学語学教育学会 LITE (於: 信州大学). 口頭発表.
2. Kiggell, T. & Muto, K. 2007. PRISM orange: Book 8. Macmillan Language house.
3. 信州大学. 2007. 信州大学シラバス. 信州大学
4. 竹内理・三根浩・佐伯林規江・枝澤康代・高原まり子. 1994. 情報化社会と外国語教育. 成美堂
5. 竹林滋. 1994. 新英和中辞典・第六版. 研究社
6. Hulstijn, H. Jan. 1989. A Cognitive View on Interlanguage Variability. *The Dynamic Interlanguage-Empirical Studies in Second Language Variation*. Plenum Press: New York
7. 米澤誠. 2007. レポート作成を起点とした情報リテラシー教育の試み. 医学図書館. Vol. 54, No. 2, pp. 160-165.

論文・資料検索サイト

1. CiNii (サイニイ) (提供 国立情報学研究所 (NII))
2. EBSCOhost (エブスコホスト) (提供 EBSCO)
3. MAGAZINEPLUS (マガジンプラス) (提供 日外アソシエーツ)
4. Scopus (スコーパス)⁸ (提供 Elsevier)
5. Web of Science (ウェブオブサイエンス) (提供 Thomson Scientific)
6. Web OYA-bunko (ウェブおおやぶんこ) (提供 大宅壮一文庫)

(信州大学 全学教育機構 非常勤講師)

(信州大学 付属図書館統括課 システム/コンテンツ形成担当係員)

2008年2月14日 採録決定